

中緯度擾乱に伴う梅雨明けについて

The withdrawal of the Baiu associated with mid-latitude disturbances

鈴木 真一[1]

Shin-ichi Suzuki[1]

[1] 防災科研 総合防災

[1] NIED

梅雨明けは多雨期から盛夏期への季節遷移といえるが、他の季節遷移と比較して急激である。梅雨明けは、日本付近に順圧的な高気圧偏差が生じ、それに伴って偏西風ジェットが北へ移動し、梅雨前線が消滅することだと考えられる。

本研究では 1980 年から 2003 年まで 27 事例の梅雨明けの過程において、梅雨明けの時期は気象庁発表の梅雨明け発表を参考としながら梅雨明けをもたらした高気圧性偏差を特定し、それがどのように生じたかを解析した。データは NCAR/NCEP の再解析データと GMS 赤外画像を用いた。

その結果、27 事例中 22 事例の梅雨明けにおいて、それをもたらした高気圧偏差はロスビー波等の中高緯度擾乱に関連していた。

これらの中では定在ロスビー波の伝搬に関連する事例は 16 見られた。この中には、偏西風ジェットに沿って伝搬する定在波と、偏西風ジェットよりも高緯度のシベリアを伝搬してくる波動の 2 種類があった。定在ロスビー波に関連した事例以外に、大陸上で発生した切離低気圧が移動しながらその下流の日本上空に高気圧偏差を作るケース、大陸上のリッジが東進して日本上空に現れる場合、がそれぞれ 3 例見られた。また、このような顕著な擾乱との関連が明瞭でない事例が 5 年あった。

多くの年ではこれらの擾乱が日本上空に高気圧偏差をもたらして梅雨明けとなっていたが、日本上空でなく、日本の北、北緯 50 度付近に高気圧偏差を作り、その影響でジェットが北上して梅雨明けとなっている例も 5 例見られた。